



日本人の余白の感覚に関する一考察
-教員養成学部の学生におけるイタリア・マーブリン
グの実践を通して-

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 宮崎大学教育学部附属教育協働開発センター 公開日: 2017-04-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐藤, 基樹, 幸, 秀樹, Sato, Motoki メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10458/5966

日本人の余白の感覚に関する一考察

－教員養成学部の学生におけるイタリア・マーブリングの実践を通して－

佐藤基樹* 幸 秀樹**

A Study of the Japanese Sense of Blank Space － Through the Practice of Italian Paper Marbling with Students in Teacher Training －

Motoki SATO* Hideki YUKI**

1. はじめに

本稿は、教員養成学部の学生個々の表現の表れから現代社会に生きる日本人の余白の感覚について考察するものである。

余白が余白として成立するためには、何もない部分に意味をもたせることが重要と言われている。近代から現代への産業・経済発展の中で、モノでも空間でも詰めた方がよい、「無いよりも有る方がよい」という価値観が流布しているように見受けられる。例えば、大型商業施設に足を踏み入れた時、屋内に大量のモノが押し込められ、宣伝文句が飛び交い、筆者は圧迫感さえ覚ることがある。大型商業施設の中で、ヒトは消費に走り、モノやコトを手に入れる。そのモノやコトを手に入れた後、人は本当に幸福を感じているのであろうか。消費することに癒しを求め、消費が目的であるようにも筆者の目には映る。大量のモノやコトを消費する量の追求は必ずしも悪とは言えない。しかし、歴史の中でヒトがモノやカネ、権力など、量を際限ない欲望で貪ったために、その代償が今、世界的な環境問題という形で表出しているという事実もある。大量のモノやコトの中から不用なモノやコトを削りに削って、自分にとって本当に必要だと感じたモノやコトに消費を向けてはどうか。徹底して削れば、削られて厳選されたモノやコトに必然性が残り、本質としてはたらしが表れる。さらに削った理由や残した理由など厳選した者の意図も込められているため、厳選した者の本質性も、そのモノやコトに表れるのではないだろうか。吉村貞司は著書『日本美の特質』の中で、「むだを削り去られ、凝縮の結果、はだかの本質にされるほど存在のはたらしが強くなる。余白とはそのはたらしの場である」と述べている。¹⁾ 筆者は、吉村が指摘するこの余白に着目して論を進めたい。

本稿では、先ず、社会の現状から問題の所在を明らかにし、その問題を解決する手がかりとして日本の美意識の一つである「余白の感覚」を取り上げる。なお、美術教育において「余白の感覚」を培うとするならば、余白の性質を正確に把握する必要がある。そのため余白とはど

* 日向市立日知屋東小学校

** 宮崎大学大学院教育学研究科

のようなものか、その性質を吉村の著書や日本画家の千住博の著書をもとに追求することで把握を試みたい。そして、「余白の感覚」を培ってきた美術教育の先行研究について振り返り、これまでの学校教育において「余白の感覚」を培ってきた手法を確認したい。さらに、一定の教養を積み上げたといみなされる教員養成学部の学生を対象に表現活動を行い、余白の感覚が働くか検証し、結果を考察しながら余白の感覚を身に付けさせるための手法の手がかりを得たい。

2. 余白について

本章では、まず社会の現状から問題の所在を明らかにし、その問題を解決する手がかりとして日本の美意識の一つである「余白の感覚」を取り上げる。次に余白とはどのようなものか、その性質について余白本来の意味を論じた吉村の著書から迫り、日本画家の千住博の著書も用いながら把握を試みたい。

2. 1 社会の現状と「余白の感覚」の必要性

昨今、少年による犯罪や悲惨な事件など、人々の心の荒廃を思わせるニュースが耳に入ってくる。現代を生きる我々の社会は底流に強い不安や閉塞感を抱いているようだ。日常生活においては、モノやコトが溢れる中で、人々の欲望が肥大化していき、本当の満足を得られず、モノやコトを得ることで一時的に心身を癒しているようにも見受けられる。モノやコトがあることで日々の生活が潤っていくという面もあるが、一方で人々の心身が物質的・精神的に圧迫されていく面もある。

圧迫感や閉塞感と言ったとき、青少年の人間関係においても気になる状況がある。筆者が教員として関わった青少年の中で、印象に深く残る場面があった。それは、多くの青少年が友人たちの間でうまく立ち回っていくために、周りの雰囲気を読み、他人に合わせて表面的なコミュニケーションを重視した会話をしているという場面である。大人数でいる時は言葉少なめに、当たり障りなく会話していたのが、筆者と一対一の状況になると、先ほどとは変わって饒舌に主張を始める、大人数でいた時に述べていた意見と真逆の意見を述べる。さらにグループの中で演じている自分の役割についての思いを吐露し始める。このようなケースが多々あり、その二面性に筆者は戸惑ってしまった経験がある。青少年の心の根底には、主張したくてもしにくい場の雰囲気による圧迫感や主張してしまった後に人間関係が崩れてしまうのではないかという不安感があり、そのことが閉塞感を生み出しているのではと、青少年の会話を聞きながら感じた次第である。また、最近では交友関係が原因で不登校に陥ってしまう児童生徒や心因性のうつ病を患ってしまう学生がいるという話を耳にすることも多くなってきており、思わず沈痛な気持ちになってしまうこともある。このような状況の中で生活を送り続ければ、ますます圧迫感や閉塞感を抱かずにはいられなくなり、青少年たちの性格形成に大きな影響が出てくると考える。人が性格を形成する上で、「個人の性格には、文化的・社会的条件が大きく作用している」²⁾との指摘もあり、昨今の青少年の置かれている社会的条件を見ると、閉塞感や圧迫感があるため陰気で引きこみがちになる性格が形成されていくことも否めない。だが、文化的条件ではどうだろうか。エドワード・バーネット・タイラー (Edward Burnett Tylor, 1832-1917) は、文化について「文化あるいは文明とは、知識・信仰・芸術・法律・習俗・その他、社会の一員としての人の得る能力と習慣とを含む複雑な全体である」³⁾と述べている。芸術と言ったと

き、日本には外国にはない独自性のある優秀な芸術作品が多々ある。それらの芸術作品は、長い年月をかけて熟成されてきた日本人の美意識が形となって表れたものである。性格形成に文化的条件が作用するのであれば、日本の文化である芸術作品をもとに日本の美意識について青少年が学びを深めることは、性格形成上重要な意味があり、その点において美術教育の果たす役割は大きい。さらに、青少年にとって日本の美意識が意図的に働くようになれば、明るく、朗らかで、活動的な性格の形成を促すことになり、現代社会が抱える閉塞感や圧迫感を打開する作用も期待できるかもしれない。このように考えると、青少年にとって日本の美意識と言ったとき、そのとらえ方は様々で膨大な数及び広範囲にわたるため、その中でも代表的なものひとつに焦点を当てたい。そこで、筆者は「余白」に着目する。余白とは「書・画の書かれていない空間のまま残された部分をいう」⁴⁾と認識されており、その重要性は、美術における西洋と東洋の手法の違いから読み解くことができる。余白の感覚は、一般に西洋にはないと言われている。余白は、英訳すると「negative space」と訳されることがあり、欧米では良い意味では捉えられていないところもある。日本の現状を振り返ると、モノやコトで溢れかえっており、人間関係においても圧迫感・閉塞感があるように見える。今こそ物質的・精神的にも空間を確保する「余白の感覚」が必要ではないだろうか。余白は何もないはずの所であるのに周囲と違い、何ものかの存在を感じる空間である。余白は想像力をかきたてる空間ともいえる。そのような空間を心の中に確保することで、青少年の精神面において余裕ができ、圧迫感や閉塞感から一時的にでも解放されるのではないか。想像するという思考過程を経ることで新たな発想が生まれ、ものの考え方や人間関係の構築の仕方に変化が生まれる可能性もある。

次節では、「余白」とはどのようなものか、その性質を正確に把握するためにも、余白について論じた吉村貞司の著書を参考にしながら余白の性質に迫ってみたい。

2. 2 余白本来の意味

美術評論家吉村貞司は、能、茶、花、石庭、俳句をもとに、余白本来の意味について次のように論じた。

「日本の余白の本質を理解するためには、芸術の縮小化をいうべきだろう。-中略-必要ぎりぎりのものだけを描いて、あとは空白にしておく。これが凝縮性のつきつめて来た究極であった。この本質性は余白の根本原理である。不用のものを削りに削って行く。残るのはギリギリの必然性である。だから削られるほど本質性があらわれ本質としてのはたらきを生ずる。-中略-むだを削り去られ凝縮の結果、裸の本質にされるほど存在のはたらきが強くなる。余白とはそのはたらきの場である」⁵⁾

不用なものを削って必要なものだけを残していった結果、余ってできた空間が余白であり、余白は残されたもののはたらきを強くする場でもあると吉村は言う。余白という部分を始めから意図してつくるのではなく、不用なものを削ぎ落していった結果、何もない空間ができてくる。この空間が余白であり、削ぎ落とされ、残されたものには本質性が表れ、はたらきが強くなる。いわば、残されたものの存在感が強くなるということであろう。

この考え方を現代社会において適用してみる。例えば、必要なモノやコトだけを厳選し、周りを余白とする。周りが余白となった分、厳選したモノやコトのはたらきが鮮明に浮かび上がってくる。厳選したモノやコトには、なぜそれを残したのかという理由が存在し、必然性が生まれる。さらに、厳選した者の考えや性格といった本質性も、そのモノやコトに表れるので

はないか。

余白というと、あえて空白として空間をつくり出すと捉える者もいよう。しかし、空間をつくり出すのではなく、削ることに余白本来の意味がある。削ることによって、残されたモノやコトの本質性が浮かび上がってくるからである。何を削って、何を残すか。余白の感覚を身に付けることで、本質を見極める目や態度も育っていくのではないだろうか。本研究では、余白とは不用のものを削った結果、残されたもののはたらきが強くなる場としてとらえ、論を進めることにする。

2. 3 水墨画における余白

絵を描く際に、余白を活かした構図にすると、人物などの対象が画面から断ち切られてしまうものの、これがかえって動的かつ変化に富んだ表現を生む。日本では、鎌倉時代から余白の構図は取り入れられており、日本絵画の特徴のひとつとして伝えられている。余白については、水墨画で語られることが多く、余白が水墨画の特徴であると述べる日本画家も多くいる。しかし、外国人にとって余白は奇異な表現として映るようである。例えば、外国人が水墨画の余白を見たとき、「なぜ、描き残しをしてあるのですか？」と質問をすることがあるという。余白は英訳すると、見た目は空白であるが満たされるべきという意味をもつ「blank」や「empty」と訳されることもあるが、時に「negative space」と訳されることもある。余白のある作品は、時に外国人にとって未完成で良くない印象を与えてしまうこともあるようだ。余白は描き残しであるのではなく、不用のものを削り取った結果、残されたもののはたらきが強くなる場のことであり、描かないことに意味がある。描かないことによって、描かれたものが際立つと同時に、描かれていない空間が鑑賞者にとって様々な想像をすることができるようにしているのである。その意味において余白は、イマジネーションが濃密に詰まっている空間であり、無限の可能性が広がっているとも言える。

日本画家の千住博は、著書『千住博の美術の授業 絵を描く悦び』の中で、捨てて捨てて残ったものが自分の文脈であると述べている。

「大切なのは、そこで捨てようとしたときに、どうしても捨て去れなかったものです。画面に浮かび上がってきたもの、そして残ったものです。そういうものが作品の魅力的な要素になってくるのです。作家の文脈はそうやって手に入れた切実なモチーフの一つ一つによって決まるのです。これはどうしても捨てられなかったというものの積み重ねが、その作家を自分は何者なのか、というところに辿り着かせる。－中略－よく考えて、捨てることです。何を描かないか、ということです」⁶⁾

よく考えた上で捨てる。しかし、捨てようとした時にどうしても捨てられないものが出てくる。その捨てられなかったものが作品の魅力的な要素になるという。ここに吉村のいう余白と同質のものが見られる。捨てて捨てて残ったものの周りの空間が余白となる。この余白には作家が意図した「何か」があった。だが、作家はその「何か」を不用なものとして見切りをつけ、捨てた。そこで筆を置いて制作を終わらせるのではなく、なおも制作を続け、捨て続けるうちにどうしても捨て去れないものが出てくる。結果として、その捨て去れないものが作品に残ることで、作品に作家の個性というものが表れてくるのではないか。吉村のいう「残ったものそれ自身のはたらきが強くなる」というのは、このことと類似していると考えられる。さらに、千住は、その捨て去れなかったものの積み重ねが、作家が何者なのかということに辿り着くと述べ

ている。社会の中で自分なりの生き方を模索している青少年たちにとって、千住が述べている「捨てる」という感覚が働けば、捨て続ける中でどうしても捨て去れないものが残り、その残ったものを積み重ねていくことで自分が何者なのかということに気づく、いわゆる自己同一性の確立も可能であろう。千住のいう「捨てる捨てる残ったものが自分の文脈である」という主張は、吉村の「不用のものを削った結果、残されたものはたらしが強くなる」と同質のものであると言えよう。

3. 学校教育における余白の先行研究

余白を学校教育において扱った事例はないのか、学習指導要領や先行研究をもとに本章で探してみたい。

学習指導要領においては、余白の感覚を培うといった内容はなく、美意識を培うという内容が明記されている。余白は美意識の中のひとつである。ここでは、学習指導要領に載っている美意識という言葉に着目し、美意識とはどのような意味で用いられているのか、また、どのようにして培っていくのかについて明らかにしておきたい。

平成20年1月の中央教育審議会の答申において、小学校、中学校及び高等学校を通じる図画工作科、美術科、芸術科（美術、工芸）の改善の基本方針及び改善の具体的事項が示され、学習指導要領の改訂が行われた。主に中学校の美術科・高校の芸術科の学習指導要領の中に、美意識に関わる内容について記載されている。

中学校の美術科では、第2学年及び第3学年の目標と内容「B鑑賞（1）ア」の中で「美意識」という言葉を扱っている。そこでは、「造形的なよさや美しさ、作者の心情や意図と創造的な表現の工夫、目的や機能との調和のとれた洗練された美しさなどを感じ取り見方を深め、作品などに対する自分の価値意識をもって批評し合うなどして、美意識を高め幅広く味わうこと」⁷⁾とある。美意識とは、「美に対する鋭敏な感覚や美を価値あるものとして尊重する心の働きのこと」⁸⁾と示されており、作品を鑑賞するときのみならず、日常生活において身の回りの様々な造形をとらえる際に、自分にとって本当によいものを判断する質の高い美意識を培うことが中学校の美術教育において求められている。

高校の美術科では、美術Ⅲの「B鑑賞ア」の中で「美意識」という言葉を扱っている。そこでは、「作者の主張、作品と時代や社会とのかかわりなどを考察し、自己の価値観や美意識を働かせて作品を読み取り味わうこと」⁹⁾とある。「美術Ⅰ及び美術Ⅱで培った価値観や美意識を働かせながら、作者の意図などを様々な視点から読み取り理解させ、味わうようにすること」とし、高校3年間を通じて培うように示されている。さらに、自分が何を美しいと感じたり、よいと思ったりするのかを自らに問いかけながら、自己の価値観や美意識を高めていくことが高校の美術教育において求められている。

以上のように、中学校、高等学校の学習指導要領において美意識に関わる内容について記載されている所を見ていくと、いずれにおいても鑑賞領域で指導することとなっている。それを受けてからか美意識を培う先行研究でも鑑賞領域で取り組んだ内容が多い¹⁰⁾。表現・鑑賞の両領域で取り組んだ美意識を育む研究としては、広島大学（学部協同研究）の研究がある。広島大学では、美意識を育む図画工作科・美術科の研究として、2010年から2013年の4年間をかけて取り組んでいる¹¹⁾。他にも美意識の発達段階について研究したものもあり¹²⁾、美意識を

培う先行研究は、表現・鑑賞領域だけでなく、他の分野においても幅広く扱われている。

学校教育において余白を扱った先行研究について筆者が調べたところ、余白を指導したとされる研究は小倉千絵の『『余白』の理解を目的とした長谷川等伯『松林図屏風』の鑑賞教材化研究』の1点のみである¹³⁾。小倉の研究は、「松林図屏風」の余白の独自性を教育内容として考察し、余白の理解を目的とする鑑賞教育の教育的可能性について明らかにした後、余白の発見と理解を目的とした授業の展開構造を検討・実践し、その有効性を検証している。結果として、余白理解は中学3年生においても可能であること、他の作品の鑑賞にも一般化できること、日本美術への関心の高まりや視野の広がりやの自覚が見られたことから教育的意義が期待できることが明らかになっている。その他の研究においては、余白という言葉は登場するものの、その効果についてふれる程度に留められており、余白を積極的に用いて表現したり、余白に着目して鑑賞したりするという研究は見当たらなかった。

小倉の研究では鑑賞に重点を置いている。筆者は、表現活動において青少年に余白の感覚を身に付けさせたいと考えている。しかし、学校教育の授業の中で、余白の感覚を1～2単位時間で身に付けさせるのは困難である。長い期間での取組が必要であり、手法や授業・単元構成など、更なる研究も必要である。本研究では、今後の研究における手始めとして、青少年に余白の感覚を身に付けさせるための手法の手がかりを得ることを目的とした検証を行うこととした。まずは、そもそも空間を確保するという感覚が現代の青少年に働くのかを見取るところから始めたい。そこで、次章では、教員養成学部の学生を対象に、余白をつくらず敷き詰めた方が美しいとされるマーブリングの技法を用いて、表現の表れを見取りながら、空間を確保するという感覚が働くのかを検証することとした。

4. 教員養成大学におけるイタリア・マーブリングを用いた検証

本章では、教員養成学部の学生を対象にイタリア・マーブリングの技法を用いて、表現の表れを見取りながら余白の感覚が働くのかを検証する。

4. 1 マーブリングについて

マーブリングは、大理石に見られる模様を水面に作り、その模様を壊さないよう紙などに写しとる表現技法のことである。写しとった時に、模様が敷き詰められた状態の方が美しいとされる。なお、小学校図画工作科、中学校美術科でもマーブリングを用いる学習活動がある。そこでのマーブリングは、市販されているマーブリングセットを用いて活動を行うことが多い。このマーブリングセットを使うと、誰でも簡単に模様を描くことができる。しかし、一定の模様しか描くことができないという短所もある。そこで、製作者が意図した模様を描くことができる方法はないかと思い、調べた結果、製作者が意図した模様を描くことができるマーブリングがあることを知った。そのマーブリングは、イタリアのある工房で行われており、見学もできるということであった。筆者は実際にイタリア・フィレンツェに足を運び、マーブリングによる制作を見せてもらい(写真1)、スタッフに材料を尋ね、日本で再現を試みた。習った通りに材料を揃え、技法を試したところ、再現することができた(写真2)。市販のマーブリングセットでは、水面に自然と模様が広がってしまうので余白をつくることは難しく、余白の感覚が働いたのか見取りがしにくい。しかし、イタリア・マーブリングは、製作者の意図した模様を描

くことができるので、白い部分もつくることができ、余白の感覚が働いたのか見取りがしやすい。そのため、検証方法として、イタリア・マーブリングの技法を用いることとした。

本稿の実践では、教員養成学部の学生を対象に、このマーブリングを用いて、「空間を確保する」という余白の感覚が働くのかを検証する。マーブリングは、模様が敷き詰められた方が美しいとされている。しかし、学生たちに余白の感覚が働けば、模様の中に白い部分（余白）をつくり出そうとするはずである。このマーブリングを行ったとき、もし、学生に余白の感覚が働けば、作品や授業後の感想に余白の感覚が働いたとされる表現や言葉を見取ることができるだろう。逆に、学生に余白の感覚が働かなければ、筆者が指導したままに製作活動が進み、従来のマーブリングによる表現が見られるだろう。その際、授業後の感想に、なぜ余白をつくらなかったかといった記述が見られるかもしれない。双方の結果を比較しながら、作品と授業後の感想を考察し、青少年に余白の感覚を身に付けさせるための手法の手がかりを得たい。



写真1 イタリア・マーブリング

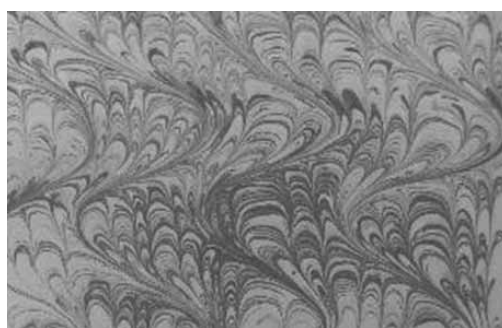


写真2 イタリア・マーブリングを再現

4. 2 検証とその結果

2015年2月2日 午前10時30分から12時

(1) 学習展開

学習活動及び学習内容	指導上の留意点	資料・準備
1 本時の学習について知る。 ○ 本時の活動について ・ マーブリング ○ 本時の目標 ・ マーブリングで、もようをつくる。	○ マーブリングについて知らせ、参考作品を用いて説明することで本時学習への意欲を高める。 ○ 学生の関心を高めた上で本時の目標を伝える。	参考作品
2 学習の進め方について確認する。 ○ 学習計画 ・ 材料と用具について ・ マーブリングの方法 ・ 注意点 ○ 時間の見直し 3 マーブリングを見る。 用具の使い方 ・ 散らす ・ ひっかく ・ まわす 4 マーブリングをやる。 ○ グループ ・ 1人2枚	○ マーブリングに必要な材料と用具、方法、注意点について実物を見せたり、動画を見せたりすることで、見直しをもって活動を進めることができるようにする。 ○ 時間については、学生の活動の様子を見ながら設定する。 ○ 数量がやってみせることで、色々な技法があることに気づかせ、学生の表現活動に生かせるようにする。 ○ 学生が考えた技法があれば、試して良いことを伝える。	細の具 粗の具 溶剤 洗濯液 白画用紙 フォット 割り箸 木製の輪 パット
5 本時学習についてふりかえり、次時の学習の見直しをもつ。 ○ 友達作品を鑑賞	○ グループで行わせることで、友人の活動を「見る」ようにし、自分の作品づくりに生かすようにする。 ○ 教員は人間関係をし、ひとりひとりの学生の作品を褒めることで自信と意欲をもたせる。 ○ 画用紙に色がつきにくい学生には、筆に含ませる水の量や線の具の量、パットに落とした線のかき混ぜ方など、技術を教えることで、作品づくりを一層楽しむことができるようにする。 ○ 作品を鑑賞する際には、批判しないことを伝え、友人の表現のよさを見つけることができるようにする。	プリント

(2) 余白の感覚が働いた作品と感想

余白の感覚が働いた作品を見ると、白い部分を残して表現した様子が見られる(写真3・4)。感想では、「絵の具をたらした所、たらしていない所をしっかりと考えれば、白い所、色のついていない所のバランスがうまくいき、いい作品になるのではないかと思います(写真5)」「絵の具を入れすぎず、白い部分を上手に使うと、きれいな作品に仕上がる(写真6)」とあり、余白の感覚が働いたととらえることができる。しかし、「削る」という厳選した結果として余白をつくったのではなく、「空間を確保する」というように、あえて余白をつくるという感覚が強い。なお、余白を肯定的にとらえていたのは、この2人の学生だけであった。55人中2人しか余白の感覚が働いていないという結果となった。



写真3



写真4

余白の感覚が働いたとみられる作品

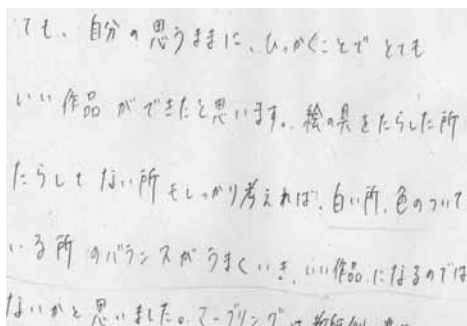


写真5

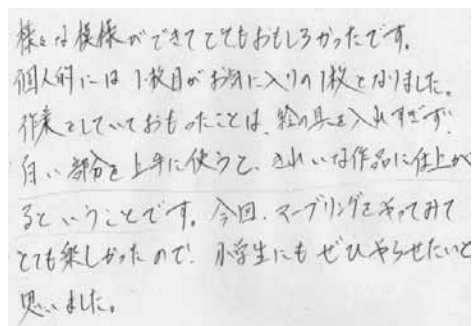


写真6

余白の感覚が働いたと思われる感想

(3) 余白の感覚が働いていない作品と感想

余白の感覚が働いていない作品を見ると、敷き詰めて表現した様子が見られる(写真7・8)。感想では、「色をたくさん使って広げないと白い所(画用紙)が残ったままだったので、もう少し広げておけば良かったと思いました(写真9)」「絵の具をたらず範囲が小さすぎると、白い部分が多くなってしまいますので、あまり面白くないな、と思った(写真10)」とあり、余白を否定的にとらえており、余白の感覚が働いていないととらえることができる。55人中53名の学生が、



写真7



写真8

余白の感覚が働いていないとみられる作品

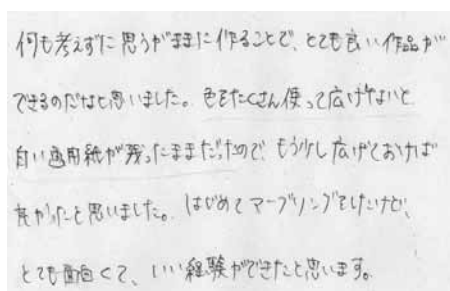


写真9

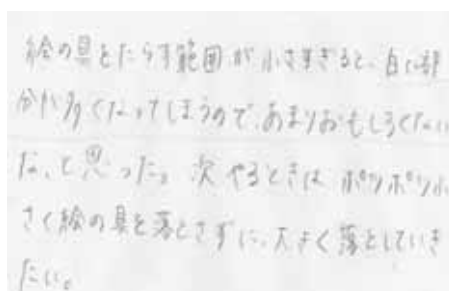


写真10

余白の感覚が働いていないと思われる感想

模様を敷き詰めた方が美しいと思っており、演習の導入部分で見た参考作品が写真1のため筆者の配慮が足りなかったことも考えられる。

(4) 考察

今回の検証では、マーブリングの技法を通して、日本人の余白の感覚を見出そうとした。余白の感覚は、マーブリング以外の方法でも見出すことは可能である。しかし、今回はあえてマーブリングという技法の習得過程から見出すことを試みた。他の製作だと構図や要素等が入ってくるため、余白の感覚が働いているのか判別しにくくなる。そこで、技法の習得というシンプルな過程に余白の感覚が働いた表現が垣間見られるかをねらいとして行った。結果として、「詰める」ことに美しさを感じており、余白の感覚が働いていない学生が大半であった。これは、検証を始める前に筆者が学生に見せた参考作品の影響が表れてしまった結果とも言える。だが、「空間を確保する」という余白の感覚が働いていると見られる学生も2名おり、少数ながらも余白の感覚が働いている学生がいるという結果が得られた。

筆者は双方の結果を眺めながら次のように考えた。もしかすると学生は、空間を確保することで生まれる美しさがあることに気づいていないのではないかということである。もし、そうだとすると、空間を確保することで生まれる美しさがあること、つまり、余白の美しさの存在を青少年に伝えていく必要があるのではないか。その点において、先に挙げた小倉の研究は大

変意義深い研究である。まずは余白の存在を知る、そのような初歩的な知識の習得が必要であろう。また、題材を工夫すれば、小学校段階でも余白についての理解や余白を用いた表現活動も可能であると考え。筆者は前回の研究において、小学校第4学年の児童に「風と水を描こう」というテーマで水墨表現を行かせた¹⁴⁾。余白についての指導は一切していないにもかかわらず、児童は余白の感覚を働かせて製作を行っていた(写真11)。この作品は、「竜巻」を描いたものである。中央に竜巻を描き、周りは何も描かずに白く残している。周りを描かないことによって、見る者に中央の竜巻の存在を強く感じさせる作品である。逆に、竜巻の強烈な風雨を表すために、竜巻の周りに「かすれ」を用いて描いている作品もある(写真12)。児童たちに、このような作品を見比べさせ、印象を尋ねることで、余白の存在やその効果を習得させることは可能ではないか。余白について適切に指導すれば、余白を用いた表現が多く生まれ、余白の感覚を身に付けさせることも可能だったのではないかと前回の研究を終えた際に感じた次第である。余白の感覚を身に付けさせるためには、まず、児童に余白の存在について伝える。次に、余白本来の意味を伝える。そして、知り得た余白を用いて表現活動を行わせる。「知」としての余白だけでなく、「技」としての余白をも習得させていってはどうか。このような一連の流れを意図的に構成した授業プログラムを実施することで、早期の段階から子どもたちに余白の感覚を身に付けていくことは可能であると考え。



写真11 余白を用いた竜巻



写真12 竜巻

なお、余白を用いた表現活動として、前回の研究でも行った水墨表現は適していると考え。そもそも水墨画は、濃淡法による表現方法を伝統としている。墨の濃淡を用いて描いたり、にじみやかすれによって描いたり、あえて紙地を残して描かなかったりしながら絵を製作していく。あえて紙地を残す表現、すなわち、余白も絵の一部として認められているのが水墨画の特徴である。注意すべき点は、「余白は残せばよいというものではない」ということである。意味のない見せかけの余白はただの気分的なもので、「空白」と呼べるものになってしまう。吉村は余白について「ほんの一部を描いて、あとは余白として残しておく方法は、ごまかしがききやすく、そのために、中国絵画(北宋時代)の造形性は衰弱に向かっていく」¹⁵⁾と指摘している。小学校段階では、このような余白性に溺れない指導を行うことも必要であろう。

また、絵の具のような、はっきりとした色彩がない墨にも注目したい。それは、学生たちにマーブリングを用いた検証を行う中で、「色が混ざるのは好きではないので、マーブルの美しさにはイマイチ理解できない」という感想が寄せられたからである。小学校の中にも、このような感性をもつ児童はいるだろう。そこで、墨の色、一色だけで表現することも可能な水墨表現は、このような感性をもつ青少年に適していると言えよう。一色だけでは物足りないと感じた

児童には、墨を水で薄めて墨の濃淡を調整することで、多彩な表現が可能であることも伝える。製作者が自分の采配で墨の濃淡を調節し、色を表すことのできる墨は、先のような学生にとっても親しみやすい用具となるのではないだろうか。

今回の検証だけでは、大半の学生が余白の感覚を働かせていないとは言い切れない。今回の結果は、端緒に過ぎないので余白の感覚については今後も追究するとともに、余白の指導の在り方や余白を用いた絵画構図の研究についても深めていきたい。

5. おわりに

不用なものを削って必要なものだけを残していった結果、余った空間が余白である。一見すると何もないが、何かを感じさせる空間であり、鑑賞者が様々な想像をすることができる空間である。もし、実生活上で余白の感覚が働き、空間を確保できたなら、その空間に向かって想像を膨らませて生活してみてもどうか。想像を膨らませることで、「察する」という気持ちが芽生えるのではないか。特に、「察する」という気持ちは、人と関係を築く時に重要である。余白の感覚が働いた時は、想像を膨らませる好機であり、察する気持ちが芽生える瞬間だと言えないだろうか。察する気持ちが芽生えれば、他者を分かろうとする心が生まれ、青少年たちにとって信頼関係のある深い交友関係を築いていくことも可能になろう。今後も余白については研究を続け、日本の美意識としての余白が世界の共通言語「yohaku」になることを目指しつつ、青少年たちにとって健やかな成長を促す研究にしていきたいと思う。

引用・参考文献

- 1) 吉村貞司, 1967, 『日本美の特質』, 鹿島出版会, p.193
- 2) 宮城音弥, 1972, 『日本人とは何か』, 朝日新聞社, p.56
- 3) エドワード・バーネット・タイラー (著), 比屋根安定 (訳), 1962, 『原始文化』, 誠信書房, p.1
- 4) 二玄社編集部, 2010, 『書道事典増補版』, 二玄社書店, p.258
- 5) 吉村, 前掲書, pp.187-193
- 6) 千住博, 2004, 『千住博の美術の授業 絵を描く喜び』, 光文社新書, p.41
- 7) 文部科学省, 2008, 『中学校学習指導要領解説美術編平成20年9月』, 日本文教出版, p.63
- 8) 同上, p.66
- 9) 文部科学省, 2009, 『高等学校学習指導要領解説芸術編・音楽編・美術編平成21年12月』, 教育出版, p.77
- 10) 足立直之, 福田隆眞, 2000, 「中学校の絵画学習における模倣と創造に関する考察」, 『山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』, 11, pp.117-129
中野寿美, 福田隆眞, 2008, 「鑑賞教育の意義と今後」, 『山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』, 25, pp.123-133
- 11) 中島敦夫, 他3名, 2010, 「自分なりの美意識を育む図画工作科指導法の在り方—ポートフォリオ評価法を活用した実践研究を通して—」, 『広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要』, 38, pp.241-246
吉川和生, 他4名, 2011, 「美意識を育む図画工作科・美術科の授業開発—創造的思考力の育成とかわって—」, 『広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要』, 39, pp.255-260

- 中島敦夫, 他3名, 2012, 「美意識を育む図画工作科・美術科の授業開発—タキシノミーテーブルの開発実践を通して—」, 『広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要』, 40, pp.249-254
- 吉川和生, 他4名, 2013, 「美意識を育むためのタキシノミーテーブルの開発実践—メタ認知領域に焦点を当てて—」, 『広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要』, 41, pp.151-157
- 12) 小泉卓, 1987, 「美意識の発達段階 I」, 『美術教育学』, 9, pp.273-282
 - 13) 小倉千絵, 2006, 「余白の理解を目的とした長谷川等伯 松林図屏風の鑑賞教材化研究」, 『美術教育学』, 27, pp.107-119
 - 14) 佐藤基樹, 幸秀樹, 2016, 「図画工作科における水墨表現の可能性を探るための国際比較研究～日本とメキシコの授業実践（小学校中学年）を通して～」, 『美術教育学研究』, 48, pp.193-200
 - 15) 吉村, 前掲書, pp.185-186